

# 人を惜しまれる神

ヨナ書



司祭 ヨハネ 井田 泉

2014年9月21日  
聖霊降臨後第15主日

奈良基督教会にて

今日の旧約聖書はヨナ書という預言書の最後のところでした。ヨナ書はわずか4頁。ほかの聖書とは違い、まるで小説のような物語であって、あまり聖書らしくありません。歴史的事実が背景にあるのか、それともまったくの創作なのかいろいろ説があるようです。

あらすじをたどってみることにします。

主なる神はヨナに命じて言われました。

**「さあ、大いなる都ニネベに行ってこれに呼びかけよ。彼らの悪はわたしの前に届いている。」ヨナ1:2**

ニネベは古代アッシリア帝国の都です。今のイラク北部。チグリス川のほとりの大都市でした。そのニネベの悪は甚だしく、言わばその叫喚と悪臭は天に達しました。これ以上放置できないと思われた神は、ヨナをニネベに遣わして、神の審判が迫っていることを伝えさせようとされました。

ところがヨナはその使命を拒み、ニネベとはまったく反対の西のかなたに逃げようとします。地中海沿岸のヤッファから、はるかに遠いスペインのタルシシュ行きの船に乗り込みました。**「主から逃れよう」と(1:3)**と2回も書いてあります。

ところが船はまもなく大嵐に見舞われました。船乗りたちは恐怖に陥り、それぞれ自分の神に向かって叫びます。積み荷を海に投げ捨てて、何とか少しでも船を軽くしようとはしますが、どうにもなりません。そのとき、ヨナは船底で寝ていました。船長はヨナを起こし、「あなたの神を呼べ」と言います。

どうして、だれのせいでこの災難がふりかかったか、くじを引くことになりました。ヨナが当たりました。皆がヨナに詰め寄って問いただします。ヨナはこう言います。

**「わたしはヘブライ人だ。海と陸とを創造された天の神、主を畏れる者だ。」1:9**

自分のことを「主を畏れる者だ」と言っているのですが、ヨナが実際にやっていることは神からの逃走です。言っていることと現実の行動とが全然一致していないのに、堂々とそう言っているところが奇妙でおかしいのですが、逆に言えば、問いただされて本来の自分のあり方に目覚めたということでしょうか。

海はいよいよ荒れてもう助かる見込みはないと思われたとき、ヨナは「自分を捕らえて海に投げ込め」と言います。恐怖の極に達した乗組員たちは、「ついに、彼らは主に向かって叫んだ」

(1:14)と書いてあります。自分の神ではなく、ヨナの信じる神に向かって叫ぶのです。ところがヨナはここに至っても主を呼ばず、祈ろうとしません。自分の責任を引き受けようとする一方で、神に向かって自分を閉ざしているようなのです。

ヨナは手足を縛られて海に投げ込まれました。すると、荒れ狂っていた海は静かになりました。人々は大いに主を畏れ、いけにえをささげて主を礼拝します。

神は、巨大な魚に命じて、ヨナを呑み込ませられました。ヨナは三日三晩、魚の腹の中、暗黒の中に閉じ込められました。

ついにヨナは神に向かって叫びます。

「あなたは、わたしを深い海に投げ込まれた。……  
わたしは思った、あなたの御前から追放されたのだと。生きて  
再び聖なる神殿を見ることがあろうかと。大水がわたしを襲っ  
て喉に達する。深淵に呑み込まれ、水草が頭に絡みつく。  
わたしは山々の基まで、地の底まで沈み、地はわたしの上に永  
久に扉を閉ざす。……  
息絶えようとするとき、わたしは主の御名を唱えた。わたしの  
祈りがあなたに届き、聖なる神殿に達した。」2:4-8

主が命じられると、魚はヨナを陸地に吐き出しました。

三日三晩の暗黒の中で、暗黒の中からの主に向かっての叫び  
によって、ヨナは造り変えられました。主から逃走するヨナで  
はなく、主に従うヨナが誕生しました。魚の腹は、新しい人を  
育む母胎のようです。

主が再びヨナに命じてニネベに行くように命じられると、ヨ  
ナはそれに従います。神の審きをニネベに告知するのです。

「ヨナはまず都に入り、一日分の距離を歩きながら叫び、そし  
て言った。『あと四十日すれば、ニネベの都は滅びる。』」3:4

ヨナは、どうせニネベの人々は悔い改めないだろうと思って  
いました。ヨナのニネベに対する嫌悪と憎しみは強く、ニネベ

は神によって滅ぼされてしまえばよいと思っていたのです。

ところが意外にもニネベの人々に悔い改めが起きました。

「すると、ニネベの人々は神を信じ、断食を呼びかけ、身分の高い者も低い者も身に粗布をまとった。」3:5

王は王座から下り、粗布をまとして灰の上に座し、断食を布告しました。

『人も家畜も粗布をまとい、ひたすら神に祈願せよ。おのこの悪の道を離れ、その手から不法を捨てよ。そうすれば神が思い直されて激しい怒りを静め、我々は滅びを免れるかもしれない。』

神は彼らの業、彼らが悪の道を離れたことを御覧になり、思い直され、宣告した災いをくださのをやめられた。」3:8-10

これに対してヨナは激しく憤ります。ヨナは神がニネベを滅ぼされることを願っていたのに、神はそれを思い直して災いを下すのをやめられました。

ヨナ書の良いところは、このようなヨナの頑なさ、心の狭さを非難しないことです。

神はこのヨナを叱りつけたり断罪したりせず、ヨナの心に語りかけられます。

「主は言われた。『お前は怒るが、それは正しいことか。』」4:4

ヨナはニネベの都を出て、東の山に小屋を建て、そこからニネベをにらみつけます。ヨナの憤りはやみません。しかしものすごく暑くてたまりません。主はヨナを憐れみ、彼の苦痛を救

うためにとうごまの木に命じて芽を出させ、ヨナの頭を陰で覆われました。

神がヨナの気持ちをわかってくださり、具体的に暑さを防いでくださったことから、ヨナの不満は消え、なだめられました。

ところが翌朝、神は虫に命じてとうごまを食い荒らさせたので、とうごまの木は枯れてしまいました。太陽はヨナの頭に照りつけ、焼けつくような東風に吹きさらされて、ヨナはぐったりとなり、死ぬことを願って言います。

「『生きているよりも、死ぬ方がましです。』

「神はヨナに言われた。『お前はとうごまの木のことと怒るが、それは正しいことか。』

彼は言った。『もちろんです。怒りのあまり死にたいくらいです。』」 4:8-9

ヨナが神に対して対等以上に口を聞き、怒りと不満をぶちまけるのが印象的です。神はヨナに問いかけて「お前のその怒りは正しいか」と言われるのですが、ヨナは「もちろんです」と言います。

ここで感じることのひとつは、感情というものを含めての人間のむつかしきです。ヨナは三日三晩の暗黒の中での祈りをおして造り変えられました。回心が起こったのです。けれども彼のうちにはなお克服されないものがあつた。ニネベを滅ぼしたいという憎しみをともなう強烈な民族主義です。しかし神の

思いは違いました。

ヨナ書は次のような主の言葉で結ばれます。

「すると、主はこう言われた。『お前は、自分で労することも育てることもなく、一夜にして生じ、一夜にして滅びたこのとうごまの木さえ惜しんでいる。それならば、どうしてわたしが、この大いなる都ニネベを惜しまずにいられるだろうか。そこには、十二万人以上の右も左もわきまえぬ人間と、無数の家畜がいるのだから。』」 4:10-11

神はニネベの人々を惜しまれました。ヨナはニネベ全体をひっくるめて怒りの対象としています。ニネベを赦す神の慈しみ深さに対して憤っています。しかし神は、ニネベに住む「人間」を見ておられます。道理をわきまえた人間ではなく、「**右も左もわきまえぬ人間**」。しかし神はその人間を惜しまれるのです。

ニネベの人々を惜しまれた神は、実はヨナをも惜しんでおられました。神から逃げるヨナを惜しみ、魚に呑み込ませて回心の機会を与えられました。いま神は、憤りのうちに死ぬことを願うヨナを惜しまれます。人間の滅びを願うままの人にとどまって、自ら滅びてはならない。ヨナの第2の回心が起こらなければなりません。しかし神は強制せず、繰り返し呼びかけ、働きかけてヨナを待っておられます。

主はわたしを愛してわたしを惜しめます。主はわたしたちを愛してわたしたちを惜しめます。同時にわたしたちではない別の人々を愛して、惜しめます。神は生かそうとされます。滅ぶことを願わず、ひるがえって生きることを願われます。神の願いがわたしたちの中にも浸透しますように。

主よ、あなたはわたしたちを惜しみ、わたしたちが滅びることのないように、イエス・キリストの苦難と復活のうちにわたしたちを捕らえ、生かしてくださいました。わたしたちがあなたに惜しまれていることを思い、自分の命と人生を大切にすることができるようになってください。また他の人々、他の国、他の民族の人々のことも大切にさせてください。主のみ名によってお願いいたします。アーメン